

指導資料

鹿児島県総合教育センター

平成29年10月発行

外国語 第85号

対象
校種

高等学校 特別支援学校

小・中学校での外国語教育のよさを生かした 高等学校外国語科の授業改善

小学校における外国語活動の導入により、小学校高学年からコミュニケーション活動に慣れ親しんだ生徒たちが高等学校に入学している。そのことを踏まえ、生徒たちの小・中学校での学びのよさを生かした高等学校の「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業実践例を示す。

1 現行の学習指導要領における言語活動

現行の高等学校学習指導要領解説で、「コミュニケーション英語Ⅰ」における内容は、以下の三つの条件を満たした言語活動を英語で行うこととしている。

- ① 情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践する活動とすること。
- ② 情報や考えなどを実際に理解したり伝えたりする具体的な言語の使用場面を設定すること。
- ③ 英語を使った言語活動を行うこと。

「コミュニケーション英語Ⅰ」は、中学校における「英語」の学習を基礎として、比較的平易な内容を学習させ、高等学校における英語の学習の基礎を培うことをねらいとしている。したがって、中学校での学習内容に繰り返し触れることができる様々な言語の使用場面を設け、活動を通して一層の定着を図っていくことが大切である。また、中学校における学習が十分でない生徒に対しては、様々な場面における言語活動を経験させ、生徒自

身の言語の内在化を促し、授業での活用を図る必要がある。

また、平成23年度から小学校高学年において外国語活動が導入されたため、現在の高校1、2年生は小学校外国語教育を経験している。この生徒たちは、小学校で外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験している。また、慣れ親しんだ音声や表現を活用しながら、コミュニケーション能力の素地を身に付け、中学校外国語科においてコミュニケーション能力の基礎を養ってきた。

外国語活動では、Small talkやClassroom English、Self introduction やShow and Tell といったプレゼンテーション活動や、道案内、買物など特有の表現がよく使われる場면을体験するなど、双方向のコミュニケーションを図る活動を積み重ねている。児童は慣れ親しんだ英語を用いて英語でコミュニケーションを図ることの大切さを知り、日本と外国の言語や文化について理解を深める体験的な活動を通して、多様なものの見方や考え方があることに気付き、言語に対する興味・関心を高め、尊重する姿を身に付けていく。

中学校では、「読むこと」と「書くこと」への慣れ親しみを加え、書き手の意向などを

理解したり、自分の考えなどを書いたりすることができるよう学習が繰り返し行われることによって、生徒は自分の考えや意見を述べるようになる。

このように、5年間かけて行われた英語への慣れ親しみや定着した言語材料を踏まえ、高等学校においてはより高度な言語活動へと発展させなければならない。そのためには小・中学校での学びを生かした高等学校での授業づくりに努める必要がある。

2 小・中学校での学びを生かす指導計画

平成28年8月に出された『外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』では「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿った資質・能力を踏まえた、一連の学習過程の改善・充実を図る必要があると述べている。コミュニケーション活動を行う際下の図1のような学習過程を経て、生徒が学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と新たに得られた知識を言語活動へつなげたりして「思考力・判断力・表現力等」を高めることが求められる。

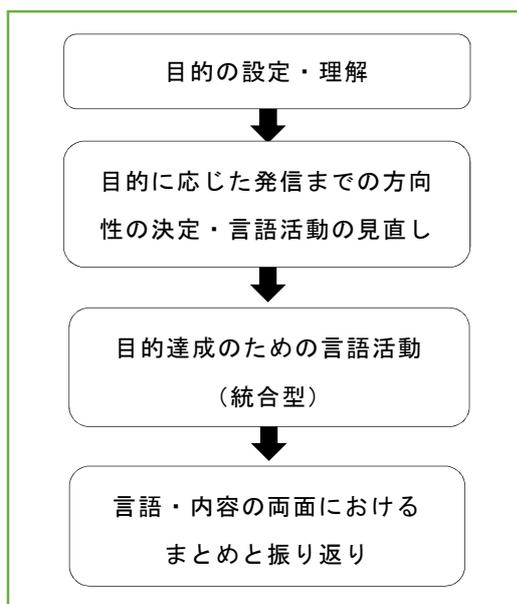


図1 目的に応じたコミュニケーションのプロセス

この学習過程は必ずしも一方通行の流れではなく、指導のねらいや、生徒の実態に応じて、戻ったり繰り返したりする場合がある。使用する教材や取り扱う言語材料によって、柔軟かつ効率的に指導計画を立てることが大切である。

このような学習過程を踏まえた指導計画を作成する際、単元を一つのまとまりとして捉え、単元終末において目指す生徒の姿を明確にした上で、それに向かって授業をどのように組み立てていくかが重要になる。

3 「コミュニケーション英語Ⅰ」における授業実践例

ここでは、「コミュニケーション英語Ⅰ」における導入・展開・終末の活動の実践例を挙げる。使用した教科書は*COMET English Communication I*（数研出版）からLesson 10 Ando Momofuku : the Father of Instant Noodle である。

この単元では、安藤百福が開発し、爆発的ヒットを放ったインスタントラーメンの発明にまつわるエピソードが描かれている。

(1) 導入

まずは単元に登場するカップラーメンを含むインスタントラーメンを教卓に並べ、生徒に次のような質問をした。

T: Have you ever had these instant noodles? Which instant noodle do you like the best?

S1: I like ○○ the best. It is good!

S2: I have never had △△. I want to try this.

T: OK, thank you. Then, which instant noodle is the oldest product? Which one is the newest? Can you guess? Talk with your neighbors and put them in chronological order.”

生徒は、教師の質問を受け、目の前に並べられた三つのインスタントラーメンを見比べて、近くの者同士で話し合い、発売順を予想した。数名の生徒に代表で並べ替えさせ、その理由を説明させた後、単元に登場するカップラーメンを取り上げ、本文へつなぐ説明を行った。

生徒は、自分がインスタントラーメンを購入したり食べたりした経験から会話を広げ、本文に示されるインスタントラーメンの歴史についての英文に対する興味をもつことができた。

(2) 展開①

本文を読ませた後は、生徒たちに、自分が担当する英文の内容を表す絵を黒板に描かせた(写真1)。

黒板に絵を描かせるに当たり、絵の巧拙は問わないこと、絵が苦手な生徒は、キーワードを絵で表すだけでもよいことをあらかじめ伝えた。生徒は、英文に含まれる情報を正しく読み取り、何の絵をどのように描いたらほかの生徒に伝わるのかを考える必要があるため、自分が担当する英文を何度も読み返し、前後の文を担当した生徒にも確かめながら描き進めていた。



写真1 英文の内容を表す絵で表現する生徒

描き終えた後、自分の絵について英語で説明させた。キーワードを基に自分で英文を作成したり、本文の英文を利用して伝える工夫を行ったりする姿が見られた。



写真2 安藤百福の海外進出構想を表す絵

写真2の絵を描いた生徒は、次のように説明を行った。

S: This is Ando. Many people loved his noodles in Japan, but he also wanted people overseas to eat his instant noodles; Chinese, French, American and so on.

英文の内容を絵で表現する活動は、単元を通して継続して行った。そのため生徒は、本文中に出てくる新出語句や文法項目について丁寧に調べたり友達に尋ねたりして、自分の役目を果たそうとするようになった。また、説明する際に必要な単語の発音を教師に確認し、音読練習を繰り返す生徒も見られた。自分の描いた絵と英文だけで何とか伝えようとしていたり、絵を用いて説明される英語を理解しようとしていたりする姿勢に、小・中学校における経験の積み重ねを見ることができた。

(3) 展開②

カップラーメンを作る手順を表す英語表現を基に、私たちの身近なものの、使用手順や作業手順を英語で伝える活動を行った。

T: I'd like you to tell us how to use these things written on the blackboard. Talk in pairs and choose one.

生徒は、まずペアになり、六つの事柄の中から説明したいものを一つ選んだ。

how to use vending machine / coin laundry / microwave oven, how to make a cup of green tea, how to send email by smartphone, how to visit shrine

次に、ペアの相手と相談して正しい手順をいかに簡潔に英語で伝えるか、教科書に出てきた表現を確認しながら作成した。

S: I'm going to tell you how to make a cup of green tea. First, boil water. Next, put green tea leaves in a teapot. Then, add hot water and wait 30 seconds.

このペアは、片方の生徒が「急須にお湯を注ぐ」を英語でどのように表現するのかを調べるために辞書を開いた時、もう片方の生徒が、教科書では『どんぶりにお湯を入れる』という説明が“add hot water”で書いてあることに気付き、addを用いて発表した。

日常生活のありふれた行為を英語で説明することの難しさを感じながら、他のペアの英語による説明を聞いて「ああ、なるほど、そう言えばいいのか。」と気付き、うなずく姿が多く見られた。

(4) 終末

本文に取り上げられた製品の会社のホームページから、商品開発の歴史について詳しく調べ、英文でまとめたスライドを提示し、安藤百福の人物像を少し掘り下げた。

その後、本文の最後にある安藤百福のモットーを表す一文“Never give up because nothing is too late in life.”から、“What is your motto?”と投げ掛け、自分のモットーについて考えさせた。生徒は、安藤百福の仕事に向かう情熱や行動力に感動し、「自分ならどのようなモットーを掲げるか」や、「このモットーを英語でどのように説明したらよいか」など試行錯誤しながら考えたものを口頭で発表し、クラス内で共有した。自分のモットーを発表するのを少し恥ずかしそうに振る舞う生徒も見

られたが、お互いのモットーを聞くのは興味深かったようである。

4 小・中・高のつながりを意識した授業設計のために

新小学校学習指導要領では、小学校第3・4学年に外国語活動が導入され、第5・6学年で外国語科として教科化された。これは、グローバル化が急速に進み、外国語によるコミュニケーション能力が生涯にわたって生活の様々な場面で必要とされることが想定される中、子供たちの将来に向けたコミュニケーション能力の向上に力点が置かれていることの表れである。

高等学校の次期学習指導要領とのつながりを意識するために、小学校外国語活動・外国語科の授業や、中学校での授業を実際に見ておくことを是非お勧めする。生徒が小・中学校でどのようにして英語に出会い、どのような言語材料を用いて、何を考え、どのような活動を通して英語に慣れ親しみ、学んできたかを知り、小・中・高等学校の学びが接続するよう授業を充実させていきたい。

—参考・引用文献—

- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』平成22年、開隆堂
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語編』平成29年6月（平成29年7月10日アクセス）
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』平成29年7月（平成29年7月30日アクセス）
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』平成29年7月（平成29年7月30日アクセス）
- 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』（平成29年5月2日アクセス）
- 中央教育審議会『外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』（平成29年5月2日アクセス）

（教科教育研修課 永山 愛子）